

令和元年5月15日現在

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04075

研究課題名(和文) 北海道における高齢者の孤立化に関する発展的研究

研究課題名(英文) Developed inquiry about lives of elderly people living alone

研究代表者

船木 祝 (Funaki, Shuku)

札幌医科大学・医療人育成センター・准教授

研究者番号：60624921

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者の一人暮らし生活を支えている精神的・社会的状況に関して、10のカテゴリーと25のサブカテゴリーに集約できた。自己との関係に関して、【死別後の変化】、【時間とともに変化する】、【人生を変えた大きな出来事】、【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】の4つのカテゴリーが、他者との関係に関して、【気持ちを支えてくれる関係】、【喜びとなる人との交流】、【人から離れる】、【つながりを見つける】、【人とのつきあい方】、【重要な他者の存在】の6つのカテゴリーが得られた。一人暮らし高齢者は自己との関係において他者の存在を思い浮かべ、他者との関係において自己の自発的意思を表明していたことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、個人の自律原則の促進を最上位の課題に置くアメリカ型生命倫理に基づく「自律パラダイム (autonomy paradigm)」が規範として示されてきた。一方、人間存在の「脆弱性 (vulnerability)」を基軸に置く倫理を示す、欧州連合「生命倫理と生命法における基礎的倫理的原理」に関する宣言である「ハルセロナ宣言」(1998年)が注目されてきた。しかし、今回の研究により、個人と共同体との二元的対立軸からだけでは分析しきれない側面があることが明らかになった。個人の内面的作業の中に他者意識が強くあったり、共同体形成に向けて個人の自発的意思表明が強く出てくる側面もあると考える。

研究成果の概要(英文)：We were able to classify the obtained information into ten categories. Four of these concerned their self-relations: (1) Changes after one's bereavement; (2) changes with time; (3) past events that changed their life style and (4) creative ability, absorbing oneself in a hobby and performing various tasks. Concerning relations with others, six categories could be noted: (5) Relations that provide encouragement to the elderly; (6) joyful interactions with other people; (7) becoming more distant from others; (8) finding connections with others; (9) ways of improving relationships with others and (10) the presence of significant others. The analysis provided suggests that the elderly imagine others while they grapple with their own problems, and at the same time express spontaneous intentions concerning their relations with others.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：独居高齢者 自立 脆弱生 個人 共同体 死別 孤独 老い

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 22 年総務省統計局国勢調査によると、65 歳以上人口のうち、16.4%が一人暮らしとなっている。平成 18 年内閣府「世帯類型に応じた高齢者の生活実態に関する意識調査」によれば、一人暮らし世帯の 7.2%が「心配ごとの相談相手がいない」、11.2%が「近所づきあいはない」となっている。さらに、国立社会保障・人口問題研究所の推計（平成 26 年）によれば、2035 年の独居高齢者の 2010 年比増加率は、全国で 53%増になる見通しである。高齢化社会が進展していく中、独居高齢者は今後ますます増加すると予測される。このような独居高齢者の孤立化に対する対策を講じることは喫緊の課題である。

2. 研究の目的

近年増加しつつある独居高齢者を社会として支援するために何ができるかを明らかにするために、北海道札幌市、留萌市、釧路市、黒松内町在住の独居高齢者に関する実態調査をする。独居年数の比較的短い、そして、団塊世代の調査対象者を選ぶことにより、独居初期の困難な時期の状況と新世代高齢者の状況を明らかにする。従来の高齢者像とは異なる視点が把握できることが予測される。本研究はこれまでの調査地域を拡大し、さらに新世代高齢者を調査対象とすることにより、全国の地域における問題解決のためのモデルを形成することを目指す。

平成 25～27 年度に行った札幌市及び留萌市在住の 65 歳以上の独居高齢者男女各 6 名計 12 名を対象とする質的記述的研究では、調査対象者の独居年数の平均が 17 年であった。そして、独居生活に困難な時期をすでに乗り越えてきた高齢者のさまざまな知恵を学ぶことができた。本研究では、独居年数の比較的短い高齢者に対するインタビュー調査をすることにより、配偶者の死別等による一人暮らしのいっそう困難な時期の状況を明らかにする。また、前回の調査対象者の平均年齢は 77.8 歳であった。今後団塊世代の新たな高齢者群が増加する。本研究は、これらの新たな高齢者群を調査研究することにより、これまでとは異なる戦後世代の高齢者像を描写することを同時に目論んでいる。さらに、本研究では、札幌市（都市部）、留萌市（道北地方）だけではなく、釧路市（道東地方）、黒松内町（道央地方）にまで調査対象地域を拡げ、北海道の地域の拡充した独居高齢者の精神的、社会的状況を明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

(1) インタビュー調査

札幌市及び留萌市及び釧路市及び黒松内町在住の 65 歳以上 90 歳未満の一人暮らし高齢者 24 名を対象とする質的記述的研究を行った。札幌医科大学倫理委員会の承認を得たうえで研究に着手した（平成 28 年 8 月 15 日、承認番号：28-2-28）。

個別訪問もしくは調査対象者の希望する場所（居宅や公共スペースなど）に、研究グループのメンバー 2 名が紹介看護師、介護支援専門員、もしくは病院職員とともに訪れ、研究参加者には、研究の目的及び方法、協力の任意性と撤回の自由、個人情報の保護、研究成果の公表について文書と口頭で説明した。同意が得られた方に対してのみ、一人暮らしの生活における精神的・社会的状況についてのインタビューガイドを用いた半構成的面接調査を実施した。面接内容は研究参加者の了承を得て録音した。

面接時はプライバシーに配慮し、また、調査に関する資料は、厳重に管理した。使用するコンピューターは、パスワードにて管理され、本研究の実施責任者及び実施分担者のみが使用した。データベースはすべて暗号を付けることで匿名化し、情報が漏洩しないように厳重に管理した。データの保管にはインターネット環境のないコンピューターを用いた。紙媒体は研究代表者の研究室の鍵のかかるキャビネットに保管した。面接調査については、身体的危険性は存在しないが、面接時の対象者の疲労や心理的負担が引き起こされる可能性がある。インタビューに際して、緊急の支援が必要と思われた場合には、可能な限り本人の同意を得て、主治医やその地域の地域包括支援センターなどに連絡できる体制をとった。

面接で得られた録音テープから逐語録を作成し、まず、逐語録を繰り返し読み返し、語られている内容をコード化した。次に共通内容をもつコードをまとめたものを集約しサブカテゴリーを形成した。そして、サブカテゴリーの中から研究参加者の体験や思いを代表する主要な概念を抽出し、カテゴリーとして分類した。分析結果に発言や意図が正しく表されているか、研究グループのメンバー間で合意が得られるまで検討し、妥当性の確保に努めた。

(2) 学会、セミナーでの発表等

平成 28 年度は、それぞれの倫理学、社会学、医療人類学、医事法の観点から高齢者の孤立化に関する研究を進めた。7 月、船木が北海道生命倫理研究会第 8 回セミナーにおいて、文献学的研究を踏まえ、独居高齢者を支える社会の倫理について報告をした。9 月からは、調査対象者への個別面接を開始し、10 月には、黒松内町への調査地域拡充のため、宮嶋を研究分担者に追加した。平成 29 年 2 月、粟屋司会のもと、船木、山本、道信、宮嶋が北海道生命倫理研究会第 9 回セミナーにおいて、これまでの調査を踏まえた報告をした。北海道生命倫理研究会発行の『北海道生命倫理研究』Vol.5(2017.3)において、宮嶋は独居高齢者調査の現状と課題についての報告を公表した。

平成 29 年度は、6 月までに、24 名の研究参加者へのインタビュー調査を滞りなく終わることができ、データ分析を開始した。7 月の北海道生命倫理研究会第 10 回セミナーにおいて、それぞれの研究者が専門の視点に立って、中間報告をした。船木は哲学的観点から、死別直後の

困難な時期から馴化に至るプロセスにおいては自己の生活、他者との関係に関してさまざまな創意工夫がなされていることを報告した。山本は社会学の観点から、地域医療における看取り、配偶者の喪失について、宮嶋は宗教学的観点から独居高齢者の生活について報告をした。8月、第4回釧路生命倫理フォーラムにおいて、船木は市民向け公開シンポジウム「老いの生 - 独居高齢者の生活」を企画し、船木、宮嶋が報告した。また、同フォーラム市民向け公開シンポジウム「老いの死について考える」において、船木は死別について、粟屋は死の恐怖について報告した。10月、宮嶋、船木は第23回日本臨床死生学会総会一般口演において、死別を受け入れていくためには、多様な死生観が役割を果たしていることを報告した。11月、日本医学哲学・倫理学会第36回大会研究発表において、船木、宮嶋、道信、粟屋は、独居高齢者が地域共同体に入っていく要因と離れていく要因について報告した。研究を進行する過程で、個別インタビューだけではなく、グループ・インタビューの必要性を感じ、改めて札幌市の診療所のボランティア活動に通う女性たちへの調査を始めた。平成30年1月、北海道生命倫理研究会第11回セミナーにおいて、粟屋司会のもと、独居高齢者調査研究について報告をした。船木は、共同体への希求と共同体から離れる要因について哲学的に考察した。宮嶋は死別と独居の状況について宗教学的考察を加えた。道信は、札幌市の診療所の高齢者向けボランティア活動をする女性たちの老いの生活様式について報告した。これらの研究の成果は、『北海道生命倫理研究』Vol.6(2018.3)において、論文もしくは研究報告として収められている。

平成30年度は、これまでの研究の集大成として、研究成果を医療者、研究者及び市民に発信することを目指した。7月、北海道生命倫理研究会第12回セミナーで、船木は調査を踏まえ独居高齢者と支え合う社会について、宮嶋は宗教学の視点から独居高齢者の生と死について、粟屋は、法学者の視点から高齢患者の人工呼吸器や胃瘻の取り外しについて報告をした。8月、第5回釧路生命倫理フォーラムにおいて、船木は、市民向け公開シンポジウム「続：老いの生 - 独居高齢者の生活」を企画し、パネリストとして独居高齢者の個人としての生き方について報告をした。8月、留萌市において、市民公開講座「一人暮らし高齢者とともに生きる私たちの社会」を主催し、報告した。船木は、高齢者と支え合いながらの地域での共同体づくりについて、山本は社会的つながりやコミュニティを維持することの方法論について、宮嶋は遺されたものを見守る死者の存在について報告をした。粟屋は特別講演において、迫り来る死にどう備えるかについて報告をした。当公開講座の内容は、8月11日及び9月4日付けの留萌新聞で紹介された。12月、船木は、第30回日本生命倫理学会年次大会において、公募シンポジウム「独居高齢者問題に関する哲学・倫理的、看護学的、宗教学的、介護学的考察」を企画し、それぞれの専門の視点から、パネリストとして船木、永田（研究協力者）、宮嶋、小館（研究協力者）が報告をした。平成31年2月、北海道生命倫理研究会第13回セミナーにおいて、粟屋司会のもと最終報告をした。船木はひとりとながりのバランスについて、道信は、晩年を集うボランティア活動の女性たちについて、山本は社会関係資本と高齢者の健康について報告をした。最終研究成果は、『北海道生命倫理研究』Vol.7(2019.3)において、論文として収められている。

4. 研究成果

研究参加者の年齢は65歳から88歳で、平均年齢は73.8歳であった。独居年数は2年から45年で、平均独居年数は7.5年であった。

一人暮らし高齢者は、まず自己との関係においては、内面的に感情と折り合いをつけたり、過去を振り返ったり、一人暮らしの生活においてさまざまな工夫をしたりして、時間経過とともに一人暮らしの現実を受容しようとしている。自己との関係において、【死別後の変化】【時間にとまなう変化】【人生を変えた大きな出来事】【自分で作る・夢中になれる趣味がある・仕事がある】という4つのカテゴリーがある。死別後の喪失感や寂寞感は当事者にとっても〔経験しないとわからない〕程、想像を超えたものである。そうした死別後の辛い時期、不眠、暴飲暴食、趣味を止める、物を多く買うといったように〔生活が変わった〕高齢者がいる。また、そこに行けば喪失感を高めてしまう〔思い出の場所に行けなくなった〕者もいる。一方、時間とともに、こうした〔辛い気持ちが薄らぐ〕様子がうかがえる。ただし、それは喪失感が解消されるのではなく、その感情と折り合いをつけながら〔紛らわすことはできる〕ということである。〔誰もが経験すること〕という死生観を基に、気持ちに折り合いをつけることもある。過去の事故や重い病気にかかった経験から、現在の等身大の自分を受け入れ、〔できる範囲のことをする〕として、日々の生活の一つ一つに取り組み姿が認められる。また、介護や仕事上における過去の大変な経験が〔人生の財産〕となって今の状況を受け入れる要因になったり、〔何があっても大丈夫〕との意識につながる様子が認められる。高齢者は、内面においてだけではなく、一人暮らしの生活においてさまざまな工夫をしている。畑仕事、絵を描くこと、漢字ドリル、クイズなどをやり〔日々の楽しみがある・家にいても退屈しない〕工夫をしている。また、辛い感情に囚われないようになったり、生活のリズムができたりといったように、〔仕事があったから救われた〕と語る高齢者がいる。

次に他者との関係においては、【気持ちを支えてくれる関係】【喜びとなる人との交流】【人から離れる】【つながりを見つける】【人とのつきあい方】【重要な他者の存在】という6つのカテゴリーがある。一人暮らしになって〔おしゃべりは大切〕であることを痛感し、〔何気ない話ができる・気にかけてくれる人がいる〕ことのありがたさを感じる。人はいくつになって

もボランティア活動などの〔人に喜ばれる喜び〕を感じる。とくに〔若い世代との交流〕に生きがいを見いだす。一方、〔いじめ〕や〔文句を言われる〕ことや、〔病気〕のため人から離れていく様子もうかがえる。人とのつながりにおいては、友人、知人といった〔以前からの知り合い〕、専門職にある人が運営する運動教室や、自治体が企画するさまざまな〔町のサークル〕だけでなく、自分たちで〔サークルを作った〕りする姿勢も認められた。人とのつながりを作り、維持し、拡張するためには、〔自分から動く〕能動的姿勢をもったり、〔人のことには立ち入らない〕〔分け隔てなく〕接触する、率先して活動する〔イニシアティブをとる人を助け〕ようとするといった、他者へのさまざまな配慮がなされている。一方、多くの集まりだけではなく、〔少数の親密な関係〕や、日々の生活や緊急のときに支えとなる存在を〔遠くの親戚より近くの人〕としてありがたく感じている姿も認められた。

高齢者が一人暮らしに生活に順応していく過程において、内面的に個人との関係においてさまざまな工夫をするだけでなく、そのプロセスには他者との関係の跡が認められる。また共同体形成の道筋の中で、他者からの影響に反応するだけでなく、自ら一歩踏み出そうする自発的意思表明の姿が認められる。高齢者は、独立した個人としての生活と共同体のメンバーとしての生活において、相互流入的な複合的な関係性を続けながら、一人暮らし生活に順応していることである。一人暮らし高齢者は、自己との関係、及び他者との関係に取り組みながら、その都度置かれた状況に対して、紆余曲折を経ながら対応していること、そしてそのプロセスには、個人が共同体かという二元的対立軸では描写しきれない交渉の跡がうかがえることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 13 件)

船木祝、宮嶋俊一、山本武志、栗屋剛：個人と共同体の混合形態 - 一人暮らし高齢者の生活，北海道生命倫理研究，第7巻，19-35，査読あり，2019。

道信良子、船木祝：晩年を集って生きる女性たちの語り - ころの風景を繋いで，地域ケアリング，第21巻第3号，61-63，査読なし，2019。

船木祝：独居高齢者の個人としての生活，地域ケアリング，第20巻第14号，62-64，査読なし，2018。

船木祝：独居高齢者の生活 - 共同体へ入る側面及び共同体から離れる側面について，地域ケアリング，第20巻第6号，79-81，査読なし，2018。

道信良子（研究報告）：老いの彼方へ - 札幌市内のファミリー・クリニックに集う女性たちの老いの様式，北海道生命倫理研究，第6巻，30-34，査読なし，2018。

宮嶋俊一（研究報告）：「死者と共に生きる」ということについて，北海道生命倫理研究，第6巻，19-24，査読なし，2018。

船木祝：共同体形成の困難な社会 - 高齢者との関連において，北海道生命倫理研究，第6巻，1-12，査読あり，2018。

宮嶋俊一：「死者と関わる」ということについて，比較文明，第34巻，6-26，査読なし，2018。

船木祝：孤独圏と共同体，人体科学，第26巻第1号，13-23，査読あり，2017。

船木祝、宮嶋俊一、山本武志、道信良子、栗屋剛：独居高齢者とともに生きる私たちの社会，地域ケアリング，第19巻第9号，52-53，査読なし，2017。

宮嶋俊一（報告）：北海道における独居高齢者調査の現状と課題，北海道生命倫理研究，第5巻，40-43，査読なし，2017。

船木祝：弱い立場の人々を支える社会の倫理についての一考察 - 「強さの倫理」と「弱さの倫理」，人体科学，第25巻第1号，13-22，査読あり，2016。

船木祝：独居高齢者を支える社会について哲学・倫理的に考える，地域ケアリング，第18巻第4号，60-61，査読なし，2016。

〔学会発表等〕(計 38 件)

山本武志：社会関係資本と高齢者の健康，北海道生命倫理研究会第13回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2019年2月2日

道信良子：人生の秋 晩年を集って生きる，北海道生命倫理研究会第13回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2019年2月2日

船木祝：ひとりとのつながりのバランス，北海道生命倫理研究会第13回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2019年2月2日

宮嶋俊一：独居高齢者における「死者との関わり」，第30回日本生命倫理学会年次大会，公募シンポジウム X「高齢者問題に関する哲学・倫理的、看護学的、宗教学的、介護学的考察」，京都府立医科大学（京都市），2018年12月9日

船木祝：独居高齢者と共同体，第30回日本生命倫理学会年次大会，公募シンポジウム X「高齢者問題に関する哲学・倫理的、看護学的、宗教学的、介護学的考察」，京都府立医科大学（京都市），2018年12月9日

栗屋剛（招待講演）：高齢者の死を考える，市民公開講座「一人暮らし高齢者とともに生きる私たちの社会」，るもい健康の駅（留萌市），2018年8月31日

宮嶋俊一：死別による独居について，市民公開講座「一人暮らし高齢者とともに生きる私たちの社会」，るもい健康の駅（留萌市），2018年8月31日

- 山本武志：社会的つながり（社会関係資本）と健康，市民公開講座「一人暮らし高齢者とともに生きる私たちの社会」，るもい健康の駅（留萌市），2018年8月31日
- 船木祝：北海道独居高齢者インタビュー調査，市民公開講座「一人暮らし高齢者とともに生きる私たちの社会」，るもい健康の駅（留萌市），2018年8月31日
- 船木祝：独居高齢者の生活 - 個人としての生き方，第5回釧路生命倫理フォーラム、市民向け公開シンポジウム「続：老いの生—独居高齢者の生活」，釧路市観光国際交流センター（釧路市），2018年8月11日
- 栗屋剛：超高齢重度認知症寝た切り患者の人工呼吸器や胃瘻を本人の同意なく外してよいのか，北海道生命倫理研究会第12回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年7月28日
- 宮嶋俊一：独居高齢者の生と死，北海道生命倫理研究会第12回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年7月28日
- 船木祝：独居高齢者と支え合う社会，北海道生命倫理研究会第12回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年7月28日
- 道信良子：老いの彼方へ - 札幌市内のファミリー・クリニックに集う女性たちの老いの様式，北海道生命倫理研究会第11回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年1月27日
- 宮嶋俊一：死別と独居，北海道生命倫理研究会第11回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年1月27日
- 船木祝：独居高齢者と社会，北海道生命倫理研究会第11回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2018年1月27日
- 17 栗屋剛：生命倫理の視点から死について考える，平成29年度第3回放送大学・岡山県立図書館連携講座，2017年12月9日
- 18 栗屋剛：自己決定とパターンリズム—生命倫理の視点から人生の最終段階にある患者への意思決定支援を考える—，第51回中国地区医療社会事業大会（岡山市），2017年12月2日
- 19 船木祝、宮嶋俊一、道信良子、栗屋剛：都市部及び非市街地域における高齢者の孤立化と自立に関する一考察，日本医学哲学・倫理学会第36回大会，帝京科学大学（足立区），2017年11月5日
- 20 宮嶋俊一、船木祝：都市部及び非市街地域における高齢者の孤立化と自立に関する一考察，第30回日本サイコロジック学会総会、第23回日本臨床死生学会総会合同大会，きゅりあん（品川区），2017年10月14日
- 21 栗屋剛：死生論，平成29年度後期吉備創生力レレッジ講座（岡山市），2017年10月1日/11月19日/12月3日
- 22 栗屋剛：死の恐怖 - 墓の下には一滴の酒もない - ，第4回釧路生命倫理フォーラム，市民向け公開シンポジウム「老人の死について考える」，釧路市観光国際交流センター（釧路市），2017年8月11日
- 23 船木祝：高齢者の死別と社会，第4回釧路生命倫理フォーラム，市民向け公開シンポジウム「老人の死について考える」，釧路市観光国際交流センター（釧路市），2017年8月11日
- 24 船木祝：独居高齢者とともに生きる私たちの社会，第4回釧路生命倫理フォーラム，市民向け公開シンポジウム「老いの生 - 独居高齢者の生活」，釧路市観光国際交流センター（釧路市），2017年8月10日
- 25 宮嶋俊一：道内独居高齢者調査報告（釧路地方を中心に），第4回釧路生命倫理フォーラム，市民向け公開シンポジウム「老いの生 - 独居高齢者の生活」，釧路市観光国際交流センター（釧路市），2017年8月10日
- 26 宮嶋俊一：道内独居高齢者調査中間報告（釧路地方を中心に），北海道生命倫理研究会第10回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年7月21日
- 27 山本武志：地域における「看取り」、「配偶者の喪失」を考える，北海道生命倫理研究会第10回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年7月21日
- 28 船木祝：独居高齢者の生活，北海道生命倫理研究会第10回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年7月21日
- 29 道信良子：高齢者のひとり暮らし，北海道生命倫理研究会第9回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年2月4日
- 30 山本武志：高齢者の在宅における終末期療養の支援，北海道生命倫理研究会第9回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年2月4日
- 31 宮嶋俊一：北海道における独居高齢者調査の現状と課題，北海道生命倫理研究会第9回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年2月4日
- 32 船木祝：個人と共同体 - 独居高齢者を支える社会，北海道生命倫理研究会第9回セミナー，札幌医科大学（札幌市），2017年2月4日
- 33 船木祝：弱さとともに生きるための倫理，人体科学会第26回大会，京都府立医科大学稲盛記念会館（京都市），2016年12月3日
- 34 宮嶋俊一：ナラティブによる自己の更新について，日本医学哲学・倫理学会第35回大会，兵庫県立大学（明石市），2016年11月5日
- 35 栗屋剛：人間のエゴ・欲望と縮小社会の可能性，第3回釧路国際生命倫理サマースクール

- & ラウンドテーブル, 市民向け公開シンポジウム「縮小社会という新たな選択 - 生き残るための知恵」, 釧路市観光国際交流センター(釧路市), 2016年8月14日
- 36 船木祝: 高齢者のためのいままでとこれからの医療倫理, 第3回釧路国際生命倫理サマースクール&ラウンドテーブル, 市民向け公開シンポジウム「高齢者医療・福祉 - いままでとこれから」, 釧路市観光国際交流センター(釧路市), 2016年8月13日
- 37 粟屋剛: 私的死生論, 北海道生命倫理研究会第8回セミナー, 札幌医科大学(札幌市), 2016年7月30日
- 38 船木祝: 独居高齢者を支える社会の倫理, 北海道生命倫理研究会第8回セミナー, 札幌医科大学(札幌市), 2016年7月30日

[図書](計 3 件)

船木祝(共著): 小山千加代編著『日本臨床死生学会 増刊号 サイエンスとアートとして考える生と死のケア - 第21回日本臨床死生学会大会の記録 - 』(「悲嘆に苦しむ人たちとともに生きる社会」147-161頁を執筆), エム・シー・ミュージック. 205(2017)

粟屋剛(編著): 粟屋剛編『生命倫理学/医療と法 講義スライドノート第3版』(第9章「死生論」108-111頁他9章を執筆), ふくろう出版. 201(2016)

船木祝(共著): 粟屋剛編『生命倫理学/医療と法 講義スライドノート第3版』(序章「倫理とは何か」2-11頁を執筆), ふくろう出版. 201(2016)

[その他] ホームページ等 <http://web.sapmed.ac.jp/hokkaido-bioethics/>

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 山本 武志

ローマ字氏名: YAMAMOTO TAKESHI

所属研究機関名: 札幌医科大学

部局名: 保健医療学部

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 00364167

研究分担者氏名: 粟屋 剛

ローマ字氏名: AWAYA TSUYOSCHI

所属研究機関名: 岡山商科大学

部局名: 法学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 20151194

研究分担者氏名: 道信 良子

ローマ字氏名: MICHINOBU RYOKO

所属研究機関名: 札幌医科大学

部局名: 医療人育成センター

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70336410

研究分担者氏名: 宮嶋 俊一

ローマ字氏名: MIYAJIMA SHUNICHI

所属研究機関名: 北海道大学

部局名: 文学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 80645896

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 永田 まなみ

ローマ字氏名: NAGATA MANAMI

研究協力者氏名: 小館 貴幸

ローマ字氏名: KODATE TAKAYUKI

科研究費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。